

や やるぞ～ ま まけないぞ～ が がんばろうぜ～ た た 楽しい学校になるように

「褒めて育てる」は正しいのだろうか？

1990年代の終わり、アメリカ合衆国コロンビア大学の著名な教授が、人種や社会経済的地位の異なる10歳から12歳までの子どもを対象に、下記のような研究をした。

STEP 1 簡単な知能テストを実施。実際の成績は秘匿し、個別に「あなたの成績は100点満点中80点でした」と全員に伝える。

STEP 2 無作為に3つのグループに分けて、それぞれのグループの子に次のように伝える。

【グループ1】 ← 「あなたは本当に頭がいいんだね」と褒める。

【グループ2】 ← 「努力の甲斐があったね」と褒める。

【グループ3】 ← (何のコメントもしない)

STEP 3 さらに課題を与え、次の2つの課題のどちらか一つを選ばせて取り組ませる。

【課題A】：難しく、平均的な子どもたちには解けないかもしれないという水準の難易度の課題

【課題B】：Aよりかなり易しくサクサクと解けるが、そこから学べるものは希薄だという課題

<その結果>

	操 作	難しい課題の方を選ばなかった子の割合
【グループ1】	頭がいいと褒める	65%
【グループ2】	努力したねと褒める	10%
【グループ3】	何も言わない	45%

STEP 4 難しい課題を選んだ子どもに、自分の成績をみんなの前で発表させる。

<その結果> 【グループ1】では、40%の子どもが本当の点数よりよい点数を報告した。

【グループ3】では、ウソをついた子どもの割合は10%だった。

STEP 5 最後に1回目と同程度の課題を与える。

<その結果> 【グループ1】の子どもたちの方が、【グループ3】の子どもたちのより、はるかに成績が悪くなった。

<研究した教授の主な見解>

- ・「頭がいい」と褒められが子どもは、自分は頑張らなくてもよくできるはずだと思うようになり、必要な努力をしないようになる。
- ・「本当の自分は『頭がいい』わけではないが、周囲に『頭がいい』と思わせなければならぬ」と思い込む。
- ・「頭がいい」という評価から得られるメリットを維持するため、ウソをつくことに抵抗がなくなる。
- ・「頭がいい」と褒められた子どもは、実際に悪い成績をとると、無力感にとらわれやすい。
- ・難しい問題に取り組む際、歯がたたないと「頭がいい」という外部からの評価と矛盾する。このときにやる気を失う。
- ・「頭がいい」という評価を失いたくないために、確実に成功できるタスクばかりを選択し、失敗を恐れる傾向が強くなる。

そして私はこう思うのです……………

当然のことながら、子どもを「褒めて育てる」ことは極めて重要。子どもの自己肯定感を高め、自信をつけさせる効果は絶大です。でも、もともとの能力や表面的なことを褒めることは逆効果となる場合があります。例えば、「頭がいい」「才能がある」「さすがお兄ちゃん」「さすが〇〇委員長」等は要注意。褒める時は、その子の具体的な努力や行動を褒めてあげてくださいね。